



hito*yume
インタビュー

巻頭特集

元マラソン選手

有森裕子

オリンピックの大舞台で二度のメダルを獲得し、大きな感動を与えてくれた有森さん。その不屈の心を育んだものは？。そしていま先生方に伝えたいことを伺いました。

【ありもり ゆうこ】
1966年生まれ。岡山県出身。就実高校、日本体育大学を卒業後、(株)リクルートに入社。92年バルセロナオリンピック、96年アトランタオリンピックの女子マラソンでは銀メダル、銅メダルを獲得した。98年NPO法人「ハート・オブ・ゴールド」を設立。2002年にはアスリートのマネジメント会社「ライツ」(現 (株)RIGHTS.)設立。07年の東京マラソンでプロマラソンランナーを引退。10年、国際オリンピック委員会(IOC)女性スポーツ賞を日本人として初めて受賞した。「国際オリンピック委員会(IOC)スポーツと活動的
社会委員会」委員他。

ご準備はいかがですか…

社会に開かれた教育課程の実現を通じて
子供たちに必要な資質・能力の育成

指導資料 PART 33

小学校

新学習指導要領改訂の要点

学習指導要領改訂の方針と新旧対照表

- 学習指導要領ガイダンス P.2~
- 新学習指導要領要点と解説 P.6~
- 総則 P.29~
- 国語 P.42~
- 社会 P.66~
- 算数 P.90~
- 理科 P.126~
- 生活 P.148~
- 音楽 P.156~
- 図画工作 P.174~
- 家庭 P.186~
- 体育 P.196~
- 外国語 外国語活動 P.216~
外国語活動 P.231~
- 道徳 P.238~
- 総合的な学習の時間 P.252~
- 特別活動 P.260~

企画・編集／一般財団法人 総合初等教育研究所
発行／株式会社文溪堂

A4判 272ページ 2色／定価 1,500円(本体1,389円+税)

2020年度から新たな教育が始まります
社会に開かれた教育課程とは…
子供たちに必要な資質・能力とは…
「学びの地図」としての学習指導要領とは…

1977年〈昭和52年〉「指導資料PART1」初刊以来、信頼と実績に支えられた指導資料シリーズ PART33を
2017年6月お届けいたします。

企画・編集／一般財団法人 総合初等教育研究所
発行／株式会社文溪堂

「先生がくれた様々なきっかけを受け止められたのは、それをキャッチできる自分という土台があったから」と語る。



「あきらめる」なんて、贅沢な発想は持てませんでした。

新橋にある有森さんが設立したスポーツマネジメント会社の一室には、1枚の写真が飾られている。

42・195キロの長い長い旅を終えて、大歓声渦まくアトラクタのオリンピックスタジアムのゴールに立つ有森さん。闘い終え、微笑んで虚空を見つめる表情が印象的だ。

その胸にはいったいどんな想いが浮かんでいたのだろうか。思いをさせていると、その写真の主が颯爽と現れた。

物づくりに興味があった、お転婆少女時代。

有森さんの子供時代の様子をお聞かせください。

生まれ育ったのは岡山市で、家族は父、母、そして兄です。私はお転婆で、ケガが絶えない子でした。

父は商業高校で簿記の教師をしていました。趣味は日曜大工。親類に金物屋さんがいたこともあって、物づくりの道具が家のあちこちにありました。父は絵も描いていたので、パステルなどの画材道具もありました。

私はよく父がテーブルなどをつくる光景を、そばでずっと眺めていて。そんな時間が大好きでした。物づくりへの憧れと興味もありました。

両親とも、躰には厳しいほうでしたね。「取り組んだらやり通すことがあたりまえ」というのが彼らの教え。「途中で物事をやめる」というのがないんですよ。

だから両親とも「もういいよ。やらなくていいよ」なんて、決して言わなかった。その教育は徹底していました。

小学校にあがってからは、兄のように勉強ができるわけではありませんでしたが、図工の時間は好きでした。手芸クラブに入って、刺繍したり、毛糸で作品をつくったり。

競争や順位づけがない世界なので、人と比べがちだった当時の私にとって、は気楽でいられたんです。

先生に会いたくて、陸上クラブへ入部した。

図工と手芸好きの少女が、陸上に興味を持ったきっかけは。

体育を教えていた安藤先生との出会いがきっかけですね。

出会いは、安藤先生が担当していたサマースクール。地域の子を集めた宿

です。子供に物事を選択させるときに好き嫌いの感覚を問うのは無駄だと私は感じますね。「成し遂げる」能力って、別にあるかもしれないから。

断られても断られても決してあきらめなかった。

そこから、ご自身の適性に気づいていったんですね。

中学では運動会で花形の八百メートル走で、三連覇できました。このことが大きな自信となって、「中長距離走の分野に、成功の要素がある」と自覚できたんです。自分の気持ち次第で、「形」にできるのはこれだ、と。

大学時代は教職を目指していたとか。

「人を元気にしたい」という想いがあって、それが私のなかでは安藤先生であり、先生という職業でしたから。

4年生のときに陸上競技の道を志し、社会人となって小出義雄監督率いる実業団チームの門を叩き、自らを売り込んだ。

泊型学習キャンプを行う「ひまわり学校」というのがあって、そこに参加していた私に先生が声をかけてくれたんです。

「元氣ないな」って。

なぜそう声をかけたんでしょう。

何か「自信なさそう」に見えたんでしょうね。かといって論ずる感じではなく、自然に話しかけてくれた。

安藤先生は人を元気にさせるような先生。誰かと比べるというより、子供の持っているものを引き出して、そ



小学生の頃、陸上クラブの安藤先生と。先生の隣が本人。

当時の私は、これといった実績がない無名のランナー。小出監督は相当私の入部に二の足を踏んだようです。でもあきらめる気はなかったですね。

人から言われて「あきらめたことって、私は一度も経験ないんですよ。だって、自分のやりたいことだから。

やる気はあっても「能力がない」と何度も難色を示されれば、普通なら心が折れるのでは…。

でも、やってみたいとわからない。能力って、わからないじゃないですか。

きっとあきらめる発想がなかったのは、ほかにこれという選択肢がなかったからです。私は不器用だから、この道をあきらめたら「私の存在自体が消えてしまう」という怖さがありました。だからあきらめるなんて、私にとっては贅沢な発想(笑)。できようが、できまいがですね。

実業団チームに入る夢は、母にはある程度は相談していました。陸上の道に進むことは、反対されなかったですね。「この子は物事を必ずやり遂げる」という、小さな頃からの信頼があったからでしょう。

日本体育大学1年生の時。関東インカレでの女子3000m決勝。前から2番目が本人。



た：「という静かな喜びですね。自分はギリギリやり切った、という達成感に包まれていました。」

このときのコメント、「自分で、自分をほめたい」は流行語に。

メダルを獲った結果があつたからこそ言えたことで、もし結果が出ていなかったら決して言えなかった言葉ですね。その後「自分で、自分をほめてあげたい」と世間では言われるようになったけれど、ほめてあげたいとは私は言っていない！（笑）。私を見た人の心情が入って、そう言われるようになったのだと思いますが。

フェアプレイ精神って何？ 子供たちの反応から 勉強中。

有森さんはいま、フェアプレイの大切さを伝える「フェアプレイスクール」の先生として、小・中学校、高校を回り、子供たちに教える活動もされていますね。

今日もこれから、子供たちがフェアプレイについて書いた作文の審査をす

るところです。

フェアプレイは元々スポーツで使われる言葉。本気でプレイするとか、一生懸命勝負にこだわるとか、相手をリスペクトするとか。

では、日常生活において、フェアプレイとは何か。教えていて、難しいなと改めて感じているんです。

フェアな行動、フェアプレイ精神って何なのかと。

フェア：改めて具体的に意味を考えると難しいです。

日本語にすると「公平」とか、「平等」とか。相手を陥れないとか、ズルしないとか、一生懸命であるとか。

では、同じ仕事をして給料が違うとフェアじゃないとなるのか。

子供たちの作文を読むと、フェアプレイについて日常生活の挨拶にまで拡大して解釈する子もいて、そのとらえ方もさまざまでした。

そのなかでひとりだけ、「フェアプレイって何だろう？」と疑問を投げかけてきた子がいて、思わず「そうそう！」って目が止まりましたね。

こうして教えれば教えるほど新しい疑問が出てきて、私も考えているところ

識して体力をつけて、五感を鍛えないといけない状況だと思いますよ。

バリアフリーで思い出しましたが、以前ある新しい保育園を見て驚きました。そこは完全バリアフリーの建物で、どっぴりゼロ。ぼーっとしていてもつまづく場所が一切ない。でもその環境では、外に出たらつまづいちゃうでしょう。危険を察知する能力が育たない。

そんな配慮した環境をつくるより、子供の方で危険そうなものを避ける能力、対応する力をつけさせるほうがはるかに大事ではないでしょうか。



2013年スペシャルオリンピックス冬季世界大会ピョンチャン。



スポーツを通じた国際協力活動に力を注いでいる。「世界の子供たちが、がんばるきっかけづくりをお手伝いできれば」

で…。子供たちから返されなければ、気づかなかつたことって、たくさんありますね。

「障害」を「違い」に 落とし込めたら。

2020年には東京オリンピックパラリンピックが開催されます。新学習指導要領ではそれを契機に「心のバリアフリーのための交流をはかる」ことが盛り込まれます。国内外で障害のある人をスポーツを通じて支援する活動をされている有森さんとしては、「心のバリアフリー」についてどう思われますか。

いまはわかりやすく「障害がある人」「ない人」と分けていますが、では「障害とは何なの？」と思うんです。先天性、後天性、加齢的なもの、また身体、精神、知的障害があり…と、単純に分けられるものではないです。一方でいま「健常者」であっても、不便がないわけではないですよ。年を取るにつれて、いずれ不便さを持つかもしれない。

つまり障害とは、その違い、不便の度合いを指す言葉。だから「障害」を

スポーツを通して、 人間力をつける。

スポーツ普及、教育振興に精力的に活動されていますが、将来にわたって目指すところは。

目指す根幹は、スポーツを通じて「人間力」をつけることです。

やはり最終的に人間力、基本は人なんです。きっかけは周りがつくったとしても、最後に決めるのは自分自身ですから。その個々の「人間力」をつけることを目指して、さまざまな形で皆さんの頑張りを応援していきたいですね。

では、いまの小中学生の子供たちに言いたいことは。

「もつと体を鍛えましょう！」。意

先生はジャッジする立場ではない。 共に育つ“共育者”なんです。

1996年アトランタ五輪の女子マラソンで、持てる力を出し尽くして3位でゴール。
バルセロナで銀メダル獲得後、相次ぐ故障に悩みながらつかんだ銅メダルだった。



写真:ロイター/アフロ

先生方はもっと自分の立ち位置を主張していい。

そして、子供たちには「もっと考えてほしいですね。足りないものがあれば、考えて工夫をする。周りに合わせてもらおうじゃなくて、自分で合わせる力を獲得する。」
自ら考え、行動することで、物事って変えられるんですから。

最後に、有森さんから先生方にメッセージをいただけますか。

「先生は子供をジャッジする立場ではない」と言いたいですね。アイデアを提供したり、機会をつくったり、子供の想いを汲んで言葉をかけたりするの、先生や大人の役割。固定観念でジャッジをして物事を決める立場ではないと思います。

「本人がどうなりたいの？」が主体であって、周りはそれを支えるように手をかけ思いをかけてあげる。そうして子供と共に育つ場、それが学校だと私は思うんですね。

子供と共に考え、経験を通して機会をつくり、育む。先生とは「共育者」だと思います。

それから、先生方はもっと自分の立ち位置をはっきりさせてもいいのではないのでしょうか。

立ち位置をはっきりさせる…その意味は。

いまは礼儀から躰まで学校に期待されていて、先生が全部責任を負って、何かあったら謝らなきゃいけないような風潮ではないでしょうか。子供が起こしたことは全部学校のせいになされがちないま、「それ、おかしいでしょ」と先生が声をあげてもいいと思う。

現実に、何十人の子供を一人でそこまで見

られるわけがないし、そもそも躰は家庭の中の、親の教育の分野ですから。学校とは何か、自分たちの役割は何か。改めて先生方はご自身の立ち位置を明確にして、主張されていい。日ごろ学校の先生方と接していて、私はそう思うんですね。

「共育者」であることに、専念できる場こそ学校だと。

現場はもっと複雑で、理想論かもしれません。

でも日々奮闘される先生方に、私はそうエールを送りたいと思います。

「人から言われて、あきらめたという経験は私にはないですね」

さばさばと頼もしく語る口調。それが変わったのは、フェアプレイ精神を子供たちに教える話題になったときだ。

「フェアとは何か。いま意味を改めて考えちゃうんですね」と、息をついた。

子供たちから投げ返されたことを真摯に受け止め、妥協せずに追求する。その有森さんの姿勢こそが、フェアではないかとも感じた。

恩師・安藤先生から「人と違っていい。お前はお前がいい」と言われ、自信が芽生えたという有森さん。

「先生とは、人を元気にする仕事」という言葉が、大きなエールとなって響くのではないだろうか。